

えんちょう通信

No.52

令和3年10月1日
福島市立清水幼稚園
発行者 佐藤 一男

言葉の力



少し前のことですが、休日に福島県立図書館に本を返しに行きました。玄関のホールのところでお母さんと女の子に会いました。その子は、「こんにちは。」と笑顔で挨拶をしてくれました。昨年度まで清水幼稚園に通っていた女の子です。今は小学校の1年生です。「2週間に1度、本を借りに来ることにしているんです。」とお母さんが話してくれました。

小学校以降の学習では、どうしても言葉の力が必要になります。小学2年生の算数の学習に次のような問題があります。子どもたちはなかなか苦労するそうです。

子どもが14人並んでいます。えいたさんの前には6人います。えいたさんのうしろには何人いますか？

子どもが一列に並んでいて、えいたさんの前には6人の子どもがいて、えいたさんは、その次にいます。問題では、そのえいたさんの後ろにいる子どもの人数を聞いています。この短い問題文からこのような状況を読み取れないと問題を解くことはできません。子どもたちは「前」という言葉に引っかかって、なかなかこのイメージが作れないのだそうです。言葉の問題でつまづいてしまうのです。(今井むつみ『親子で育てることば力と思考力』2020 筑摩書房)

このように小学校に入学してからの学習には言葉の力がどうしても必要です。日常の会話をする言葉だけでは足りないのです。

それは国語の問題だけではなく、算数も理科も英語の学力にも言葉の力は欠かせません。ですから幼稚園のときから読書の楽しさを教えていくことが大切です。本が大好きになっていれば、必ず「自分一人でも読みたい」と思うようになります。そしてどんどん自分で読書をし、言葉の力を身に付けていきます。「読書の秋」、親子で図書館に足を運んでみてはいかがでしょうか。

小学校の校庭は「あこがれ」の場所です

小学校の校庭で運動会の練習を始めた頃のことです。年少組の男の子がみんなから離れて、近づいてきました。そして「僕も、お兄ちゃんみたいに、ここで(運動会)やるの?」と聞いてきました。去年、お兄ちゃんが運動会で小学校の校庭を走るのを見ていて、うらやましく思っていたので



しょう。「そうだよ。みんなもここでやるんだよ。」と答えると、その子はうれしそうにまた運動会の練習に戻って行きました。

子どもたちにとって小学校の校庭は「あこがれ」の場所です。幼稚園の園庭の何倍も広い校庭で、運動会ができるのは本当に幸せなことです。コロナ禍の中、小学生との交流はなかなかできませんが、このような環境があれば子どもたちは自然に小学校を身近なものとして感じるようになっていきます。